

論が余りにも的確であったため異論を唱える余地のなかったこと等から、必ずしも白熱した論議を呼ぶには至らなかったが、それは偏えに司会者たる私の力量不足でもあったのである。

ただその論議のなかで、ギリシア的ヒューマニズム——ペラギウスを中心とする——に対するアウグスティヌスの異端視に、ルターのルネッサンスヒューマニズムに対する批判の原型が見られるのではないかと、13世紀になるとスペインでのイスラムの力がおとろえ、キリスト教国は力をもってこれを制圧しようとした。そのときトマスは、自然理性による、すなわちことばによる談合によって両者が共存しうることを確信し、それを押し進めた。これは人道主義というヒューマニズムのもつ、もう一つの意味を明確化したことでもあり、同時に学的ヒューマニズムと重なり合うものではないか等々、貴重な質疑の行われたことは記憶されなければならない。

昨年度、本年度のこの積み重ねられた論議を受け継いで次年度も『中世後期におけるヒューマニズム』の問題が採り上げられる。会員各位の活発な参加を期待してやまない。

提題 十二世紀のヒューマニズム

柏木英彦

I D. ノウルズの見解——11世紀後半から12世紀前半にかけて、とくにフランスにおいて生じた、西欧最初の創造的的文化として deep and sympathetic humanism を認める。その特徴は第一に文芸の文化で、古典にたいする delicacy と自己表現力にある。たとえばラヴァルダンのヒルデベルトゥス、ソールズベリのヨハネス。また古代のある人物を賢者として自己の生の規範にし、emotional な共感、すなわち学問の権威としてよりは personal な敬愛の念を懐く。たとえばアエルレドゥス・リエヴァレンシス。かかるヒューマニズムは12世紀後半に衰微する。これにたいしスコラ学では思想の枠組がすべてで、古人にたいする態度は impersonal である。D. Knowls, "The Humanism of the Twelfth Century" (The Historian and Cha-

racter and Other Essays, 1963 所収)。

R. サザーンの見解——いわゆる *litterae humaniores* を否定する。ソールズベリーのヨハネスにしても、古典のおびただしい引用にもかかわらず、その source にはまったく無関心で、古典文芸について感受性をもっていたとは言えない。こういう文芸のヒューマニズムではなく、scientific view of Humanism によって中世ヒューマニズムを評価する。1100年から1320年までが最も偉大な時代であり、人間本性の価値を強く意識し、自然全体の秩序を認め、人間の理性によって宇宙全体の秩序を探究しようという態度で、トマス・アクィナスにおいて頂点に達する。R. Southern, "Medieval Humanism", "Humanism and the School of Chartres" (Medieval Humanism and Other Studies, 1970 所収)。

二人の高名な中世史家は価値判断を先に立て、一方はイタリア・ルネサンスに近づけて人文主義を肯定し、他方は12世紀を修辭から論理への転換と捉える史観に基づき時代遅れと一蹴する。なるほどサザーンの言うごとく、時の花形は弁証論であったかもしれない。それは一方でたとえばアベラールに見られるような成果を生んだが、しかし他方プティボンのアダムが嘆いたごとく、詭弁論、論争術に堕しがちで、理知主義に陥る危険もあった。こういう風潮を背景にしてヒューマニズムの立場を見るならば、それは言語能力と知力の結合を必須とする理性主義、諸学芸間の均衡感覚ではなかったかと思われる。自然と理性の発見はM. シュニユやF. ヘーアも指摘するところで (M. Chenu, *La théologie au douzième siècle*, 1956 ; F. Heer, *Aufgang Europas*, 1949.), 12世紀と13世紀の連続的な面として認められるが、しかしサザーンのようにアンセルムス、クレルヴォーのベルナル、シャルトルのティエリを同一線上に並べたのでは、精神類型の異質性を無視するも甚だしい。12世紀ヒューマニズムの特質を明確にするには、結果に関する価値判断に先立って、その志向に目を向けるべきではないか。

II 人文主義と対立するのは、速成の技術教育、実利主義、弁証論を憎み詩を不要とする類の宗教家であるから、世俗的な学としての自由学芸、とくに三学科に積極的意義を認めることが人文主義の一つの徴表になる。シャルトルのティエリの言葉借りれば、それは人間性を磨くため (*ad cultum humanitatis*) の学芸であり、古典作家についての手引書によればサピエンティアを身につけるために必要であっ

た。ヒルザウのコンラド『範例作家についての対話』では、サピエンティアを追求する者は世俗の学問を尊重すべきで、サピエンティアを見出すまで、精神は世俗の学問を通じて磨かれねばならないと説かれている。「キリストにおいて哲学する者は自由学芸の研究に教えられる。」世俗の学問が時に探究者の精神を惑わすことがあるとしても、聖書のより深い叡智を捉えるには、段階を踏む必要があると (*Dialogus super auctores*, ed. R. Huygens, 1955)。そこで、世俗的かつ異教の産物たる古典に寓意的解釈をほどこす、すなわち *integumentum* の理論により倫理的寓意を引き出すことになる。こういう *moralizatio* の極端な例が、伝ベルナルドゥス・シルヴェストリス『アエネイス註釈』で、アエネイスの物語を、身体に閉じ込められた魂が自己の神的本質を認識するに至る過程と解釈する。J. W. Jones and E. F. Jones (eds.), *The Commentary of The First Six Books of the Aeneid of Virgil commonly attributed to Bernard Silvestris*, 1977.

一方、ソールズベリのヨハネスなどは、こういう方法を容認しないかに見える。おそらくこの『アエネイス註釈』を指してのことと思われる箇所、聖書釈義には *allegoria*, *typologia*, *anagogia* の方法を認めながら、言語に関わる自由学芸については、文字そのものの表わす意味に満足しないならば、真理から逸脱することになろうと述べて、寓意的解釈に危惧の念を懐いている。Policraticus, ed. Webb, vol. II, VII, xiii, 1929.

したがって古典について二様の接近の仕方があったことになろう。ともあれ12世紀の学人は概して「古代の著作家にたいして文学的趣味よりは哲学的観念を引き出すという態度をとった」(G. Paré, A. Brunet, P. Tremblay, *La renaissance du XII^e siècle*, 1933) と言えるのではないか。

提題 13世紀「ヒューマニズム」の一考察

日 下 昭 夫

13世紀の「ヒューマニズム」について何かを語ろうとするとき、何をもって「ヒ